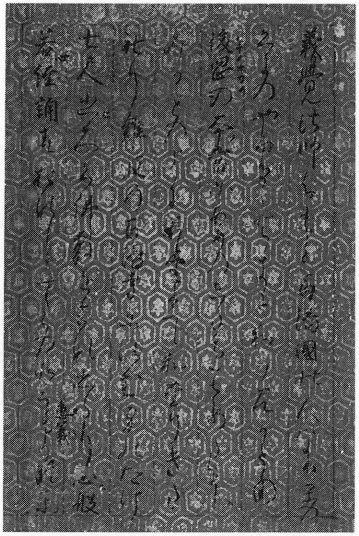
跡見学園女子大学国文学科報　第二十六号　（平成十年三月十八日）

新出『三宝絵』東大寺切の本文と研究（遺稿）

和田英道
〔付記〕小島孝之

①

〔一〕中巻・七「義覚法師」



（料紙は「亀甲紋つなぎ」）

義覚法師はもと百済国の人なり①かの
③くにのやふるゝ④ときにわかみかとの
後岡（ノチノオカノ）の本宮⑤にあめのしたをさめたまふ
みかとのよにあたりてわ⑥たりてわ⑦たりきた
れり難波の百済寺にすむ身のたけ
七尺ひろく⑧（ヒロ）佛教をまなひたり⑨（ニ）心般
若経誦す⑩おなしてら⑪のそう（恵義）⑫○よなか⑬

〔東京国立博物館蔵本〈東寺観智院旧蔵本〉〕

義覚法師トイヒケル僧ハモト百済国ノ人也彼国ノヤフレシ」時我朝後ノ岡本ノ宮ノ雨ノシタオサメ給シ帝ノ代ニ渡キ」タレリシ也難波ノクタラ寺ニスム身ノタケ七尺弘ク佛ノ」ヲシヘヲマ

ナヒテ般若心経ヲ誦ス同寺ノ住僧恵義トイフ」夜中

〔以下の本文は山田孝雄校合関戸本〈東大寺切〉本文を『三宝絵集成』が復原したものによる〕

義覺法師はもと百濟國の人也①彼②の
國③のやふる、時④にわかみかと
後の岡本の宮⑤のあめのしたをさめたまふ
みかとの代⑥にあたりて渡⑦きた
れり難波の百濟寺にすむ身のたけ
七尺弘⑧く佛教をまなひたり般⑨
若心經誦す同寺⑩の僧⑪恵義⑫といふ夜⑬中

（東大寺切（上段）と山田孝雄校合関戸本〈東大寺切〉（下段）との本文異同）

①なり↔也　②かの↔彼の　③くに↔国　④とき↔時　⑤に↔の　⑥よ↔代　⑦わたり↔渡　⑧ひろ↔弘　⑨心↔ニ　⑩おなしてら↔同寺　⑪そう↔僧　⑫×↔といふ　⑬よなか↔夜中

②

〔二〕下巻・十七「大安寺大般若会」

（料紙は右丁「菱唐草つなぎ」、左丁「七宝つなぎ」）

うつしつくりて大安寺となつく平①天む天王②
のよにたふ③をたてたまふゝるきさ④かのこと
くに丈六のさ⑤うをつくらむとおほす願
をおこしてよきたくみをえさせた⑥まへと
いのり⑦たまふよのあかつき二⑧ゆめに一⑨人のそ⑩
うきたりて申すさきのとし⑪こ⑫のほとけをつ⑬
くりしものはこれ化人なりかさねてきたる
（帖の折り目、褐色化。蝴蝶装のためか）
へきにあらすよきたくみといへ⑭とな⑮ほかたな⑰
のあときすあり⑱よきゑしといへともそのいろ⑲丹
あやまり⑳ちなきにあらすたゝか㉑みのおほき
ならむをかのほ㉒とけのま㉓へにかけてかけを㉔
うつしてをかみ給㉕へつくりにもあらすかくに
もあらすして三身そなはるへしかたちを
みるはお㉖う身なりかけを㉗うかふるはほう

〔東京国立博物館蔵本〕

ウツシ作テ改」リテ大官寺トナツク文武天皇ノヨニ塔ヲタテタマフフルキ尺迦」乃コトクニ丈六ノ像ヲツクラムトオホス願ヲ、コシテヨキ工ヲエシ」メ給ヘト祈給夜ノユメニヒトリノ僧来テ申サキノ年此佛ヲ」ツクリシハコレ化人ナレハカサ子テ来ヘキニアラスヨキ工トイヘトモ」ナヲ刀ノキスアリ畫師トイヘトモ丹色ノアヤマリ■■（墨滅）ナキニ」アラスタ、大ナラム鏡ヲ佛ノ前ニカケテ影ヲウツシテヲカミ給ヘ」ツクルニモアラスカクニモアラスシテ三身ソナハルヘシ形ヲミルハ應」身ナリ影ヲ浮フルハ報

〔山田孝雄校合本復原〕

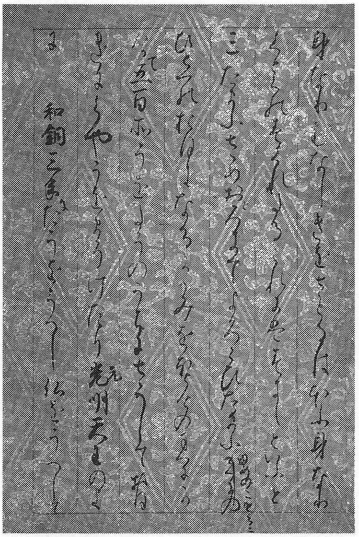
うつしつくりて大安寺となつく天武天皇①②
のよに塔③をたてたまふふるき尺迦④のこと
くに丈六の像⑤をつくらむとおほす願
をおこしてよきたくみをえさせ⑥給へと
祈⑦たまふよのあかつき⑧にゆめにひとりの僧⑨⑩
きたりて申すさきの年⑪此佛⑫をつ⑬
くれりしものはこれ化人なりかさねてきたる
へきにあらすよき工⑭といへとも⑮なを⑯すこし刀⑰
のあときすあり⑱よきゑしといへとも丹⑲の色
あやまち⑳なきにあらすたゝ鏡㉑のおほき
ならむをこの佛㉒の前㉓にかけて影㉔を
うつしてをかみ給㉕へつくりにもあらすかくに
もあらすして三身そなはるへし形㉖を
みるは應㉗身なり影㉘を浮ふるは報㉙

（東大寺切（上段）と山田孝雄校合本（下段）との本文異

同）

①平(天)む↔天武　②王↔皇　③たふ↔塔　④さか↔尺
迦　⑤さう↔像　⑥たま↔給　⑦いのり↔祈　⑧ニ
↔に　⑨一人↔ひとり　⑩そう↔僧　⑪とし↔年
⑫このほとけ↔此佛　⑬つくりし↔つくれりし　⑭たく
み↔工　⑮も（東大寺切は傍注、校合本は本文化）　⑯
すこし（東大寺切は傍注、校合本は本文化）　⑰かたな↔
刀　⑱よき（東大寺切は傍注、校合本は本文化）　⑲そのい
ろ↔丹(ニ)の色(イロ)　⑳り(ち)↔ち　㉑かゝみ↔鏡　㉒か↔こ
㉓ほとけ↔佛　㉔まへ↔前　㉕かけ↔影　㉖へ（東大
寺切は小書き）　㉗かたち↔形　㉘おう↔應　㉙かけ
↔影　㉚うか↔浮　㉛ほう↔報

③



（料紙は「菱唐草つなぎ」）

身なりむなしきをさとるはほふ身なり①②
くとくのすくれたるこれにはすきしといふと③④
三たまふさめおろきてよろこひたまふくにの⑤⑥⑦⑧(ゆめのことくニ)
ひとつのおほきなるかゝみをほとけのまへにか⑨⑩⑪
け五百そうをたうのうちにさうしておほ⑫(て)⑬⑭
きにくやうをまうけたり光明天王のよ⑮⑯(元)
に　和銅三年たうをうつし仏をうつして⑰⑱(に)⑲

〔東京国立博物館蔵本〕

身也空キヲサトルハ法身也功徳スクレ」タル事コレニハスキシシト見タマフサメ驚テ悦玉フ夢ノコトクニ」一ノ大ナル鏡ヲ仏ノマヘニカケ五百僧ヲ堂ノ中ニ請シテ大ニ」供養ヲ儲タリ光明天皇ノ代ニ和銅三年ニ堂ヲウツシ佛ヲ」ウツシテ

〔山田孝雄校合本復原〕

身なり空③きをさとるはほふ身也②
功徳のすくれたるこれにはすきしと④
⑤ミたまふさめおとろきて悦⑥玉ふ⑦夢⑧のことくに
一⑨のおほきなる鏡⑩を仏⑪のまへにか
けて五百僧⑫を堂⑬のうちにさうしておほ
きに供⑭養をまうけたり元⑮明天皇のよ
に和⑯銅三年に⑰堂⑱をうつして佛をうつして

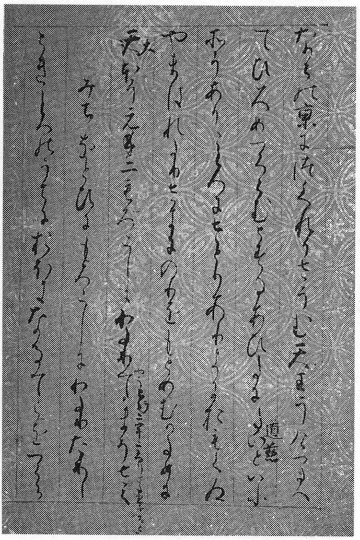
（東大寺切と山田孝雄校合本との本文異同）

①むなし↔空　②なり↔也　③くとく↔功徳　④いふと↔×　⑤三↔ミ（字母は同じだが、東大寺切は楷書で「三」）　⑥と（東大寺切は傍注だが、校合本は本文化）　⑦よろこひたま↔悦玉　⑧ゆめのことくニ（東大寺切は「くにの」を見消ちして傍注。また、「ゆめ」↔「夢」）　⑨ひとつ↔一　⑩かゝみ↔鏡　⑪ほとけ↔仏（『三宝絵集成』は他は「佛」。ここは「仏」）　⑫て（東大寺切は傍注だが、校合本は本文化）　⑬そう↔僧　⑭たう↔堂　⑮くやう↔供養　⑯光元明天王↔元明天皇　⑰（東大寺切は「和銅三年」の上は二字分空白）　⑱に（東大寺切は傍注だが、校合本は本文化）　⑲たう↔堂

この一葉については、安田尚道氏の翻刻と以下のような解説がある（「『三宝絵詞』東大寺切とその本文（四）」〈『青山語文』第二十五号、一九九五年・平成七年三月〉）。

一九九三年十一月に東京古書会館にて実見。東京古典会『古典籍下見展観大入札会目録　平成五年十一月』にカラー写真（1／1・25）がある。『三宝絵略注』311ページに部分的に引用されているが、この断簡の全文が翻刻されるのは今回が初めて。3行目傍書「ゆめのことくに」の「と」は某字の上に重書。7行目「和銅」の前、二字分の空白。安田氏と私解とでは平仮名の字母の扱い方に多少の相違がある。

④



（料紙は「七宝つなぎ」）

①ならの京につくれりさうむ天王②うけつたへ
てひろめつくらむとするあひたにたい③（道慈）といふ
④そうありこ⑤ゝろにさとりあり⑥よに⑦おもく⑧ゐ
やまはれたりさきに⑨のりをもとめむかために
⑩（大）天ほう元年二⑪もろこしに⑫わたりて⑬（やうろう）二年にかへりきたりて□⑭かとニ
（ママ）みちをとひにもろこしにわたりたりし
⑮ときこ⑯ゝろのうちにおほきなる⑰てらをつくら

〔東京国立博物館蔵本〕

奈良ノ京ニツクレリ聖武天皇ウケツタヘテヒロメツクラムト」スルアヒタニ道慈トイフ僧アリ心ニサトリアリテ世ニ重クシ敬」ハレタリサキニ法ヲモトメムカタメニ大寶元年ニモロコシニ渡リ」シ時モ心ノ中ニ大ナル寺ヲツクラ

〔山田孝雄校合本復原〕

①奈良の京につくれりさうむ天皇②うけつたへ
てひろめつくらむとするあひたに道③慈といふ
④僧あり⑤心にさとりあり⑥て⑦世に⑧重くゐ
やまはれたりさきに法⑨をもとめむかために
⑩大寶元年に⑪もろこしに⑫渡りて⑬やうらう二年に
かへりきたりてみ⑭かとにまうさく（ママ）
みちをとひにもろこしにわたりし
⑮時心⑯のうちにおほきなる寺⑰をつくら

（東大寺切と山田孝雄校合本との本文異同）

①なら←→奈良　②王←→皇　③東大寺切は本文「たい」で「道慈」は右注　④そう←→僧　⑤こゝろ←→心　⑥×←→て　⑦よ←→世　⑧おも←→重　⑨のり←→法　⑩東大寺切は「天」を見消にして「大」と注す。校合本は「大寶」　⑪二←→に　⑫わた←→渡　⑬東大寺切は「やうらう～かとニ」を右注で補入　⑭□（東大寺切は判読不可能）←→み　⑮と

き↔時　⑯こゝろ↔心　⑰てら↔寺

⑤

（料紙は「七宝つなぎ」）

むとおもひてさいまうしのかまへつくれる①②
さまをうつしとれりとまうすみかとよろこひ③④⑤
てわか願のみちぬるなり⑥⑦⑧⑨とのたまふ○天平元年に道慈
におほせてこの寺をあらためつくらしめた⑩
まふすなはちたうしにりしのくらゐをたまふ⑪⑫
天ちくのさゑこくのきをむさうさとそ天⑬⑭⑮⑯ハと
の宮をまなひつくれりもろこしのさい明寺き⑰⑱

〔東京国立博物館蔵本〕

ムト思テ西明寺ノ構ヘ作レルサマヲ」ウツシトレリト申御門悦
給テ我願ミチヌル也トノ給天平元年ニ」道慈ニ律師ノ位ヲタマ
フ中天竺ノ舎衛國ノ祇薗精舎ハ都率」天ノ宮ヲマ子ヒツクレリ
モロコシノ西明寺ハ祇

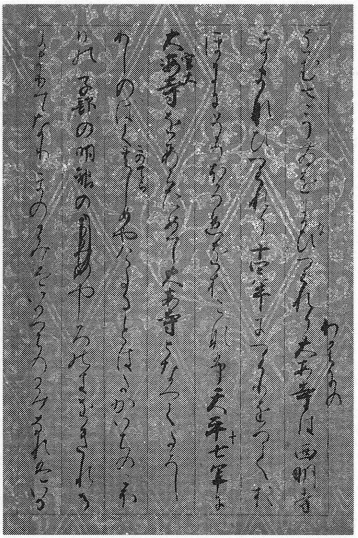
〔山田孝雄校合本復原〕

むとおほてさいまうしの構へ作れる①②
さまをうつしとれりと申御門悦③④⑤
給て我願のみちぬる也⑥⑦⑧⑨との給天平元年に道慈
におほせてかの寺をあらためつくらしめた⑩
まふすなはち道慈にりしの位⑪⑫をたまふ
天竺の舎衛國の祇薗さうさはとそ天⑬⑭⑮⑯
の宮をまなひつくれりもろこしの西明寺祇⑰⑱

（東大寺切と山田孝雄校合本との本文異同）

①おもひ↔おほ　②かま↔構　③まうす↔申　④みかと↔御門　⑤よろこひ↔悦　⑥て↔給て　⑦わか↔我　⑧なり↔也　⑨東大寺切は「とのたまふ」右注で補入。校合本は「との給」を本文化　⑩こ↔か　⑪たうし↔道慈　⑫くらゐ↔位　⑬天ちく↔天竺　⑭さゑこく↔舎衛國　⑮きをむ↔祇薗　⑯と（傍記三字目は塗沫）↔はと　⑰さい↔西　⑱き↔祇

⑥



（料紙は「菱唐草つなぎ」）

①をむさうさをまひ②な③つくれり④わかくにの○大安寺は西明寺
をまなひ⑤つくれり十四年に⑥つくりをへてお
ほきにそうほうゑを⑦おこなふ天平⑧十七年に
⑨官大大安寺をあ⑩らためて大安寺となつくたうし⑪
りしのはく⑫い○はしめやけたるこ⑬このてらとはたかいちのこ⑮ほ
りの子部の⑯明神のか⑰みのやしろのきをきれる
によりてなりか⑱のかみはいかつちのか⑲みなれはいか

〔東京国立博物館蔵本〕

薗精舎ヲマ子ト作」レリ我國ノ大安寺ハ西明寺ヲマ子ト作レリ十四年ニ作ヲヱテ大」ニ法會ヲ行フ天平十七年ニ大官大寺ヲ改テ大安寺トナツク」道慈律師ノ云ク此寺ハシメヤケ、ル事高市ノ郡ノ子部ノ」明神ノ社ノ木ヲキレルニヨリテナリ此神ハ雷ノ神ナレハイカ

〔山田孝雄校合本文復原〕

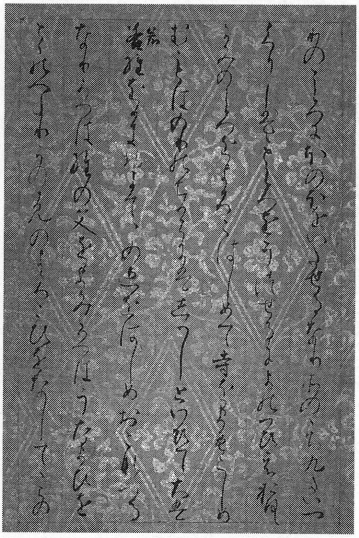
①薗さうさをまなひ②作れり③我國④の大安寺は西明寺
をまなひ⑤作れり十⑥四年に作をへてお
ほきにそうほうゑを⑦行ふ天平十⑧七年に
⑨大官大寺を⑩改て大安寺となつく⑪道慈
りしの云く⑫此寺⑬はしめやけたる事⑭たかいちの郡⑮
の⑮子部の明神の⑯社⑰のきをきれる
によりてなり⑱此神はいかつちの神⑲なれはいか

（東大寺切と山田孝雄校合本との本文異同）

①をむ↔薗　②な（東大寺切は傍注、校合本は本文化）
③つく↔作　④わかくにの（東大寺切は右傍注を補入、校合本は「我国の」を本文化）　⑤つく↔作　⑥つくり↔作　⑦おこな↔行　⑧十（東大寺切は傍注、校合本は本文化）　⑨大安寺（官大）↔大官大寺　⑩あらため↔改　⑪たうし↔道慈　⑫東大寺切は「いはく」の「い」傍注、校合本は

「云く」と本文化　⑬このてら（東大寺切は傍注、校合本は「此寺」と本文化）　⑭ことは←→事　⑮こほり←→郡　⑯子部←→子部（コヘ）　⑰かみのやしろ←→社　⑱かのかみ←→此神　⑲かみ←→神

⑦



（料紙は「菱唐草つなぎ」）

りのこゝろにほのほをいたせるなりそのゝち九たいつくりしはゝところをうつせるによのつひえおほしかみのこゝろをよろこはしめて寺をまもらしむことはのりのちからにはしかしといひて大は谷経（若）をかきおきてこのゑをはしめおこなへるなりかつは経の文をよみかつはうたまひをとゝのへたりかのかみのよろこひをなしてゝらの

〔東京国立博物館蔵本〕

リノ心ニホノヲ、出セルナリ其後九代ツタヘツクレリシハ〳〵所ヲウツセルニ」其ツヒエ多シ神ノ心ヲヨロコハシメテ寺ヲマホラシメム事ハ法ノ力」ニハシカシト云テ大般若経ヲカキヲキテ此會ヲハシメオコナヘルナリ」且ハ経ノ文ヲヨミ且ハ哥舞（ウタマヒ）ヲト、ノヘタリ神ノ悦ヲナシテ」

〔山田孝雄校合本復原〕

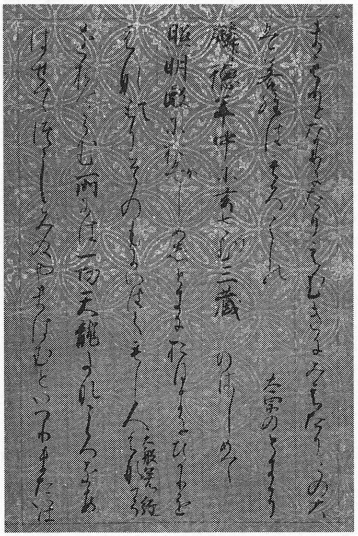
りの心にほのほをいたせるなり其後九代つくれりしは〳〵所をうつせるによのつひえ多し神の心をよろこはしめて寺をまもらしむ事は法の力にはしかしといひて大は若經をかきおきて此會をはしめおこなへるなり且は經の文をよミ且は哥舞（ウタマヒ）をとゝのへたりこのかみの悦をなして寺の

（東大寺切と山田孝雄校合本との本文異同）

①こゝろ←→心　②そのゝち←→其後　③たい←→代　④つ

くり←→つくれり　⑤ところ←→所　⑥おほ←→多　⑦かみ←→神　⑧こゝろ←→心　⑨こと←→事　⑩のり←→法　⑪ちから←→力　⑫東大寺切は「谷」の右に「若」と傍注、校合本は「若」を本文化　⑬このゑ←→此會　⑭かつ←→且　⑮かつ←→且　⑯うたまひ←→哥舞（ウタマヒ）　⑰か←→こ　⑱よろこひ←→悦　⑲ゝら←→寺

⑧



（料紙は「七宝つなぎ」）

①まもりとなりにたりえむきにみえたり②この大③は若経はもろこしの④（マヽ）太宗のときに⑤

麟徳年中に玄さむ⑥三蔵⑦（マヽ）のはしめて
⑧照明殿に⑨おはしめし⑩ときに⑪おほきにひかりを
⑫はなちりそのもにいはくもし人はなかう⑬大般若経
をおけらむ所には一切天龍たなこゝろをあ⑭⑮
はせてつゝしみゐやまはむといへりまたい⑯⑰は

〔東京国立博物館蔵本〕

守トナリニタリ縁起ニ見ヘタリ此大般若経ハモロコシ乃」大宗ノ時麟徳年中ニ玄奘三蔵ハシメテ翻譯シテ昭明殿」ニヲカシメシ時ニ光ヲ放テリソノ文ニ云モシ人般若経ヲオケラム」所ニハ一切ノ天龍タナ心ヲ合テツゝシミ敬ハムトイヘリ又云

〔山田孝雄校合本復原〕

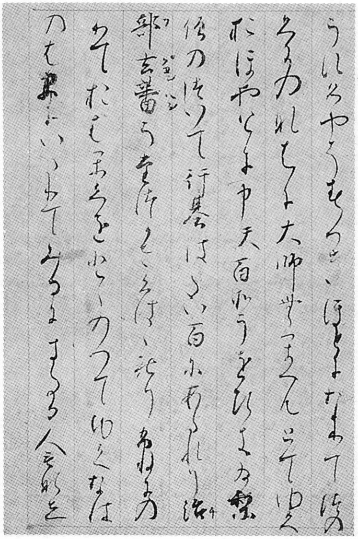
①守となりにたりえむきにみへ②たり③此大
は若經はもろこしの④大宗の⑤時に
麟徳年中に玄さう⑥三蔵⑦のはしめて
⑧昭明殿に⑨おかしめし⑩時に⑪おほきに光を
⑫放てりそのもに⑬いはくもし人大⑭はなかう
をおけらむ所には一切⑮天龍たな心⑯を合
てつゝしみゐ⑰⑱やまはむといへり又云

（東大寺切と山田孝雄校合本との本文異同）

①まもり←→守　②え←→へ　③この←→此　④太宗（上に三字分空白）←→大宗（空白なし）　⑤とき←→時　⑥さむ←→さう　⑦東大寺切は「の」の上一字分空白　⑧照←→昭　⑨おはしめ←→おかしめ　⑩とき←→時　⑪ひかり←→光　⑫はなちり←→放てり　⑬東大寺切は「はなかう」と「大般若経」を二行に書くが、校合本は「大はなかう」のみ　⑭こゝろ←→心　⑮あはせ←→合　⑯また←→又　⑰いは←→云

⑨

〔三〕中巻・三「行基菩薩」



（料紙は「七宝つなぎ」）

うすくやうすへきほとになりてつの
くにのなはに大師むかへんとてゆく
おほやけに申天百そうをひきゐり（注一）
僧のついて行基はたい百にあたれり治
部玄蕃うたつかさくはゝれりふねにの
りておむかくをとゝのへてゆくなは
のはまにいたりてみるにきたる人もなし

（注）
一　「り」は初め「て」。撫書きで「り（梨）」に改める（同筆）。
二　「ま」は初め「ら」とおぼしき文字。撫書きで「ま」と改める（同筆）。
三　寸法は縦24・3、横15・3㎝。

（小松茂美氏『古筆学大成』釈文との異同）
①き←→［き］　②ん←→む　③天←→て　④クエン←→クエン
⑤蕃←→番

〔東京国立博物館蔵本〕
奏スレハ供養セムトスルホトニ成テ摂津国ノ難波ノ津ニ」大師ノムカヘトテユク即オホヤケニ申給テ百僧ヲヒキ」井タリ次ニ行基ハ第一日ニアタリ給ヘリ治部玄蕃」雅楽司等ヲ船ニノリクハヘテ音楽ヲ調テユキ向ニ難」波ノ津ニイタリテミレハ人モナシ

この東大寺切に関する『三宝絵集成』の解説は、「東大寺切一葉（中略）は、愛知県の稲木直泰氏所蔵のもの。一幅。昭和十七年五月卅日重要美術品に指定せられてゐる。猶、写真は『濤聲館藏品入札圖録』（昭16・6）に掲載されてゐる由、宮沢俊雅氏より御教示いただいた」とある。

その後、小松茂美氏は、『古筆学大成』第二十五巻「漢籍・仏書・其の外」（平成五年〈一九九三〉十一月、講談社）に「伝源俊頼筆　東大寺切本三宝絵」として79葉の写真（原寸大の写真18葉、原寸の二分の一の写真61葉）と釈文を収載された。その中の一葉がこの東大寺切であるが、写真は鮮明でない。おそらく小松氏は、この切を実見されたのではなく、写真によって釈文を作成されたのであろう、例示したような異同がある。

平成七年十月一日～三日、東京美術商協同組合主催（於・東京美術倶楽部会館）の展示即売会でこの一葉が展示された。その『第十三回東美特別展』図録に鮮明なカラー写真が掲載されたので、会場もしくは図録によって見た人も多いと思われるので、参考のために供したいと思う。

この切は、重要美術品指定ということもあり、二千数百万円の売り値であったと仄聞する。

〔付記〕

同年代の古い友人である和田英道氏の遺稿をお預りし、このような形で整理公表することを任された者として、若干の事情を説明させていただくことにする。

和田氏は余命いくばくもないことを宣告されながら、最期の病床の上で、この原稿のまとめに執念をもやされていたということである。令夫人から依託された原稿は四方八方に切り貼りし、赤・青・黒の三色の鉛筆と、万年筆とを使い分けて矢印やら番号やら、さらにはゴチック、明朝等の指定等、さまざまに書き込まれたもので、さながらパズルを解くが如き態であった。思案の末に、せっかく和田氏が貼りつないだものではあるが、一旦ばらばらに切り離し、彼の指定の順番に従って、新たな原稿用紙に貼り直すことにした。そうしてみると、記号も不統一があり、原稿の欠けている箇所もあって、未定稿というべき状態にあることがわかってきた。しかし、そのままでは、彼の意志が充分に活かせないと思われたので、最低限の範囲で彼の意図に沿って欠を補うことにした。

和田氏は、東大寺切の翻刻と東博本の翻刻を上下に対照して印刷に付すつもりであったらしかったが、それは錯綜し過ぎて困難であったので断念した。本稿の主たる目的は未公表の新出東大寺切の内容を学界に紹介することにあったとおぼしい。これらの内容は、『三宝絵集成』が山田孝雄博士のノートの校合本を翻刻していることによって、かつては関戸家本の一部として存在したこ

とが知られているが、今回の写真と比べると異同が甚だしいことがわかる。山田博士のノートは校合本であるから当然のことであるが、それだけに現物の写真の公表は極めて意義が大きいのである。したがって、和田氏は、校合本の本文を東大寺切の字配りに準じて比較することで、その相異の実態を明らかにしようとしたようである。しかし、時間が足りなかったのであろう。②の断簡に対する東博本の翻刻と、⑤～⑧の断簡に対する校合本の翻刻及び異同の原稿は作成されていなかった。異同箇所の指示番号は東大寺切の翻刻の方に記入されていたので、①～④の方法に倣って、⑤～⑧の校合本の本文と、⑤～⑧の異同一覧の部分は、今、私の責任で補った。その他、記号の不統一の訂正、若干の明らかな誤りは、これも私の責任において訂正したが、原稿の原形は可能な限り崩さないように意を用いたつもりである。なお、二枚分程の原稿が手許に残っているが、入れるべき箇所と意図を理解し難かったので割愛せざるを得なかった。おそらく、さらに考証を加えたかったものと考えられるが、そこまでの時間が彼に与えられなかったことを遺憾に思う。

なお、ここに影印に付した写真は、和田氏が先年ある所でたまたま入手されたものということであるが、詳細は不明である。和田氏が記している如く、一部は市場に姿を現わしており、現蔵者は分散しているものと想像される。

論文題目は和田氏の遺稿に記載がなく、今、小島の責任において新たに付したものであることをおことわりする。

和田英道という真摯な学究の、研究者の良心というべきか、はたまた業というべきか、その生命の最期を懸けた仕事に、私は胸打たれ、襟を正して向かい合ったことを申し添えたい。

末筆ながら、ここまでに至る間にお世話になった各位に厚く御礼を申し上げる。和田氏の御冥福をお祈りして筆を擱く。合掌。

（小島　孝之　記）